OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	機関誌発刊によせて ： 現代デザインの地盤
Author(s)	井島, 勉
Citation	デザイン理論. 1962, 1, p. 1-5
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52414
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

機関誌発刊に寄せて

―― 現代デザインの地盤 ――

井　島　　勉

関西意匠学会の結成については，たしかに私も一役買った。もう四，五年にもなろうか，関西の各大学の構成や意匠や建築などの教官たちの集まりの席で，デザイン理論に関する研究集会や学会活動のないことが慨かれていた。学会がないならつくればよいではないかと発言したのが私である。さいわいに大学外の研究者たちの協力や支持も得られて，まもなく関西意匠学会が結成された。成立準備のお手伝いがすめば，私は退陣するつもりでいた。私には美学会の世話だけでも重荷だからである。ところが熱心な各位の勧誘をうけ，会員として参加することになった。のみならず，意外にも会長の名を汚す羽目となってしまった。

この学会は，優秀な委員や幹事の献身的な尽力によって，健全な運営と発表をとげてきた。比較的新らしい学問分野であるから，いきなり高度な学問的水準は望めないけれども，これまで開かれた研究例会や年一度の大会の実状を見ても，学究的な見識も意欲も尊敬されるべきものであり，将来の発展も大いに期待される。私をも含めた全会員にとってまことに有益な研究の場がうまれたことは，同慶の至りである。

もとよりデザイン理論の研究といっても，それに含まれる分野は，多岐にわたっている研究会に出ても，直接に自分と関係の深い分野の発表が聴けることは，むしろ珍らしいことかも知れぬ。しかし技術講習会のようなものならいざ知らず，理論研究の学会の場では，日ごろ隔っている各自の研究成果を交換することが重要なのである。理論というものは，実践や事実に接しる部分では，極めて多様に分化しているけれども，理論として深まれば深まるほど，互いに接近しあい，からみあって，しだいに一元化するものであるから，学問研究の場で交換される各自の業績は，表面いかに無関連のように見えても，他山の石よりももっと密接かつ有益な示唆を含むものである。このような心構えは，学会人としては極めて不可缺なものであり，またかかる心構えの持ち主たちのためにのみ，学会は

本来の使命を達成することができる。一足さきに活動を始めている姉妹学会の美学会の場合でも，そこに包括される研究分野は多種多様にわたっているが，それにもかかわらず，よく学会の任務を果している。

関西意匠学会は，いよいよ機関誌を発行することとなった。学会が会員の手による機関誌を出すことは，その本来の機能を遂行するためには当然のことといわねばならぬが，誕生して日の浅い，しかもこれというスポンサーを持たぬこの学会が，遂にその機会を迎えたことは，学会の成長を物語るものとして慶賀に堪えない。有力な研究発表の場所として会員の活発な活動が行られるとともに，刊行の事務を担当してくれる幹事諸君の労を多としなければならぬ。私もその創刊号の発刊に際して，一会員としての義務を果させてもらおう。

私は美学理論の一研究者であって，特にデザインに関する理論家でもなければ，実践家でもない。私に発言できることは，所詮は美学の立場からの考察であるに過ぎない。そのような角度から，現代のデザイン隆盛の，美意識史的背景に関する根本的な一面を考えてみたい。

デザインと美とは，必然的な関連があるようにも見え，全く別の事柄であるようにも見える。美に関する諸制約は，そのままデザインに対してもあてはまる面があるようにも思われ，また，近代の機械文明とそれによる生活が見出したデザインは，独自の生産過程と実用性の問題を含み，美の世界とはまるで別の世界に属する事柄とも考えられるからである。けれども私は両者が，たとえその起源を異にするものであるにしても，少なくともその意味内容の上で深いつながりを有し，しかもそのことの故に，デザインが現代人の重大な関心事となっている事情を考察したい。但し美にもデザイン的な構造がひそむとか，デザインについても美の要素が重要であるとか，というようなことをいいたいのではない。問題はいま少し深いところに存するのである。

美とは，「美的に気にいる」というだけのことではない。人間による，独特の意味内容を有する，第二の世界創造なのである。人間がつくらなければ，人間がつくろうとしなければ，存在することのできない世界である。詳しくは拙著『美学』（創文社刊行）を参照してもらうほかはないが，たとえば視覚的な美についていうならば，美とは，さまざまな歴史的現実の中に生きている人間の目が，そのような現実の中に生きている自己の（根源的な）生そのものの表現を，彼がいま現に見ている色と形の中に見出した時に，始めて

つくり出されるものである。そのような美がうみ出されなければ，いかなる対象も，「美しいもの」となることはできない。山も花も，美しいものとなり得ることは期待できるにしても，それらが現実に「美しいもの」となるためには，どうしても人間の目に媒介されなければならないのである。しかもその目は，単に対象の色と形をうつし取る生理的器官たるにとどまらず，いつもその人間の生命的な自覚に充たされていなければならない。このようにして，人の目が，自己の生命のいぶきをもって，美をつくり出す。勿論，美の特性上，彼は，その際さまざまな日常的拘束から解放されて，自己自身の本来的な，自由の状態にたちもどることが要求されるのであるが，たとえそのような限定の下にではあるにせよ，美は，一定の歴史的社会の中に，特定の世界観をもって生きている人間の，根源的な生の自覚を内容としている。いきおい美や美意識に歴史があることとなる。そしてこのことが，芸術の歴史というものの根抵でもあるのである。

かって人間が閉された生き方をしていたころ，もしくは特定の権威を信じそれにすがって安心を得ていたころ，彼らの美意識は，限られた境涯と，権威への随順の中に閉されざるを得なかった。美は，日常的現実の世界を超えた別の場所に索められ，一定の規範によって固く縛られていた寺院の内陣，貴族の邸宅，社交や遊興のちまた，茶室や床の間など，すべて日常的世界を超えた閉された場所に，しかも一定の伝承や流派や流儀のきびしい規格を守って，見出されるのが常であった。生命感情や生活意識の閉鎖性と美意識の閉鎖性とは，まさに対応する関係にあるといえる。

このような事情は，これまで自由美術と呼ばれていた絵画や彫塑の作風に照らしても明らかであるが，機能性（実用性）と結びつく，従って不自由美術などとも称された，建築や工芸のデザインに徴してもすこぶる顕著である。そこでは，人間の美意識は，厳粛な規格の踏襲を中軸として発揮され，機能性に対しても，極めて疎縁かつ異質の関係にあるもの，むしろ機能から離れた遊びの意識としてはたらくのが常であった。従って，機能を果すべき建築物や工芸品が美しい芸術品となるためには，外部から装飾的要素が附加されることが多く，ときには機能作用の犠牲を強いてまで虚飾に流れることもあり，しかも因襲のパターンを勇敢に革新することは容易ではなかった。建築のプランニングやディテイルの造作，陶器や漆器の造形装飾デザイン，衣服や染織図案のデザインその他，随所にその実例を見出すことができよう。

右のような場合，大局的に見れば，美と機能とは，いわば相矛盾する関係にあった。機能とは生活の機能にほかならぬのだから，日常的な生活意識から遊離した美意識の立場と

しては，むしろ当然のなりゆきというべきであろう。そこでは，美の立場は，日常性を超えて，倫理性や宗教性に接近することにもなる。しかもそれは，その時代の世界観や人間観の特質に基づくものであった。

ところが，それに反して，現代人は，世界を挙げての不穏な半世紀の歩みを通じて，伝統的な権威に対する絶望的な不信，封建的な倫理的・宗教的拘束からの虚無的な解放，個我的・実存的な人間自由の確信，機械文明の激流におびやかされる人間喪失の不安などを迫られ，そこに現代の世界観や人間観の歴史的特色を認知せざるを得ない情勢を迎えた。現代人のこのような生の状況の自覚を内容とする現代の美意識は，必然的にあらかじめ定められた典型的な規格や伝統的な覊絆や固定した法則などの拘束から解放されて，むしろ個性的・衝動的・偶然的な生命表現の中に満足を見出そうとする傾向が強い。それは，一見，秩序に対する無秩序，構築に対する分解，均整に対する破綻のようにも見えるけれども，それはそれなりに現代の生の状況を表現する現代の美の様相なのである。このことはたとえば現代絵画の動向に照らしても明らかであろう。そこでは伝統の拒否，具象形態の超克，遠近法的法則の無視，衝動的技法の駆使などを通じて，絵画的表現の次元を超現実的・深層心理的・実存的な層にまで深めようとする試みもさかんである。

以上のような情勢は，一言でいえば，人間性の解放に基づく美意識の解放と呼ぶこともできるだろうが，美意識の発揮される場所に関しても，類似の解放現象を指摘することができる。というのは，かって日常的生活の場所を超えた閉された世界に限界づけられていた美意識が解放されて，日常的生活の場所の隅々にまで及ぶようになったのである。宮殿や茶室や床の間に閉じこめらていた美意識が，そのわくから解放されて，工場や台所やあらゆる機械製品にむかって翼をひろげてはたらくようになる。つまり，特定の権威によって規範づけられた生の場所ではなく，なまのままの生の場所，換言すれば日常的生活の場所における一切の可視的・造形的な対象が美意識の動機となる。かくして生まれたものが現代におけるデザイン意識の特徴である。デザインの本来的な役割は，あらゆる時代の造形芸術においても演じられていた。しかしそこでは，デザインは，美術に奉仕する単なる文法であったり，美とは無縁の，単なる技術的設計であったりしていた。ところが現代のデザインは，それ自体が，現代的に解放された美意識の所産であり，しかも日常的な生活と直結した場所に見出されるものなのである。

現代の美意識については前に触れた。それが産み出していくデザインは，単に場所的にのみでなく，むしろ本質的・根源的に日常的な生活感情と密接な関聯をもつ，いきおい機能

性と不可分の関係を有することとなる。しかしそれは，デザインが生活用具に即して見出されるという理由よりも先に，デザインを求める現代の美意識の本質によるのである。美と機能とは，本来的に異質のものである。ときには両者を無差別視しようとする粗雑なる機能主義理論や，外部的に接着しようとする常識的な装飾主義理論が行なわれたりしたけれども，むしろ真相は，現代の美意識が必然的に両者をオーヴァーラップせしめるところに，現代デザインの成因を求めるべきである。そして，近代機械文明との関聯や抽象美術との関聯なども，造形的にはもとより無視すべきではないにしても，より根源的なる事態として，現代の生と美意識の内面的な結びつきを想わざるを得ないのである。

執筆者紹介

井島　勉	京都大学文学部教授 （関西意匠学会会長）
河本敦夫	京都工芸繊維大学工芸学部教授
向井正也	京都市立美術大学助教授
南原七郎	兵庫県立兵庫工業高校図案科教諭
重成基	京都学芸大学教授 （関西意匠学会委員長）
宇都宮誠太郎	成安女子短期大学教授
宮島久雄	京都大学大学院